

モスクワと北京、香港

熊倉 潤

「中央アジア現地事情」のコーナーでは、中央アジア現地での体験の報告がなされるのが通例と思われるが、今回は、2013年6月から2016年1月にかけて筆者が行った、モスクワと北京、香港での資料収集に関して報告したい。はじめ原稿の依頼を受けたとき、このような地域の逸脱が果たして許容されるのかと不安に思ったが、モスクワと北京、香港での資料収集は、いずれも中央アジア地域を事例とする筆者の博士論文のために行ったものであった。モスクワと北京、香港における文書館、図書館等に分散している中央アジア関連の資料について書くことには、もしかすると何かしらの意義があるかもしれないと思い、寄稿することにした。何卒ご容赦いただきたい。



写真1. ルガスビ

ここでは最初に資料収集の目的と概要を書き、次に資料収集の際に気づいた点をモスクワ、北京、香港のそれぞれに関して述べたい。筆者が行ったモスクワと北京、香港での資料収集は、筆者の博士論文の執筆を目的としたものであった。博士論文の具体的内容については、別の機会における報告を期したいが、概略としては、1920年代から40年代におけるソ連カザフ共和国（その前身の自治共和国）と、1950年代から70年代の中国新疆ウイグル自治区（その前身の新疆省）を事例に、ソ連邦構成共和国と中国少数民族自治区の政治エリート集団の形成変容過程に関する比較研究をテーマとするものであった。ソ連に関する事例研究では、主にモスクワにあるルガスビ РГАСПИ ロシア国家社会政治史アルヒーフ（旧・ソ連共産党中央アルヒーフ）のソ連共産党（全連邦共産党、ロシア共産党）中央委員会のフォンド（フォンドとはロシアの文書館における文書群の単位）を利用した。具体的には、カザフ共和国及びその前身の自治共和国の党組織の頂点にあたる、カザフスタン共産党中央委員会ビューロー会議及びその前身の党委員会ビューロ

一会議の決議及びその付属資料、ビューロー会議秘密会議の決議、総会の議事録を中心に活用した。また旧・レーニン図書館所蔵のカザフスタン共産党機関誌『カザフスタンスカヤ・プラウダ』（Казахстанская правда）等も利用した。一方、中国に関する事例研究においては、主に『組織史資料』、『通志』等と呼ばれる資料集を参照した。具体的には、主として『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』等に拠っている。『組織史資料』及び『通志』等は、個々の政治エリートの就任期間、生年、民族籍等を網羅的に記載しており、政治エリート集団を研究する上で貴重な情報源である。これに加えて、党機関紙『新疆日報』等の新聞、また回顧録等の内容も踏まえた。資料は、北京の国家図書館と香港の香港中文大学・中国研究服務中心（中国研究サービス・センターとも訳される）において収集した。

これらの資料を集めるにあたり、気づいた点は以下である。まず、モスクワのルガスピに所蔵されている連邦構成共和国の共産党中央委員会ビューロー会議の議事録に関しては、1946年以降のものが非公開となっていた点である。モスクワのルガスピ、旧・レーニン図書館の一般的なことについては、ここでは述べないが、非公開の資料が今なお多く存在することは読者諸兄姉もご存知の通りである。このビューロー会議議事録に関してもご多分に漏れず、1945年以前のものしか請求、閲覧することができなかった。ただ、1945年以前に関しては資料の残存状況は概ね良好で、筆者が閲覧したカザフ共和国及びその前身の自治共和国に関しては、1926年1月以降45年12月までのほぼ全てのビューロー会議及び秘密会議、地方委員会総会の資料から、ビューロー会議の出席者、案件の提起者、決定内容、報告内容等を知ることができた（但し一部には資料の散逸が見られる）。

次に、北京の国家図書館に所蔵されている『新疆日報』等の新聞類は、完全にマイクロフィルム化されており、ほぼ全ての号を閲覧できる。閉架式であるものの、請求から40分ほどで手に入るため比較的便利である。ただし、マイクロフィルムの機械は古く、部分的に壊れているものが多く、映写すると暗いものが多かった。同図書館で特に有益な点は、所蔵されている回顧録が豊富な点であろう。建国後の新疆の歴史



写真2. 中国国家図書館

に関する回顧録も、呂劍人『我的回憶』（西安：陝西人民出版社、1997）、王永慶『歴史的的回声——格爾夏回憶録』（五家渠：新疆生産建設兵団出版社、2008）等があり、請求、閲覧、そして無制限の複写が可能である。なお、回顧録とはやや異なるが、近年の習仲勲ブームにより、1950年代前半に習仲勲が中共中央西北局第二書記であった時期のことも、最近出版された多くの書籍に記載されるようになった。習仲勲に関する書籍も国家図書館は多数所蔵している。



写真3. 香港中文大学・中国研究服務中心からの眺望

それから、香港中文大学・中国研究服務中心に所蔵されている『新疆日報』等の新聞類は、研究環境の点で利便性が比較的高いと思われたが、今は少し利便性が落ちており、将来飛躍的に利便性が高まる可能性がある。2013年に筆者が調査した際には、新聞類が整然と並べられた書庫の中に入って紙媒体の実物を手に取ることができたため、非常に便利に感じられた。紙媒体なので、マイクロフィルムに比べ、長時間閲覧しても目に優しくかった。ところが、2015年に再訪した際には、新聞類は別の書庫に移送されており、恐らく引越の際に新聞の並べ方がバラバラになってしまったと見られ、読みたいものを探すのに苦労することになった。もっとも、書庫の中に入ることができ、紙媒体で閲覧できる点は以前と変わらない。また現在、新聞類のデジタル化が企画されているとのことで、将来実現した暁には利便性が飛躍的に高まると考えられる。

同センターの更に優れている点は、省及び自治区レベル、それから州、市、県等のレベルの『組織史資料』が数多く揃っているところであろう。その中の『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』に関して言えば、党外の多くの人々に読まれることを想定していないため、また限られた読者に対して微妙な問題に関する理解を徹底させるため、たとえば1962年に新疆で発生した「大量越境国外逃亡」、「5・29反革命暴乱」等、敏感な話題にも言及している。『組織史資料』がこれほど多数収蔵されている場所は、世界的に見ても稀であり、希少価値が高いと言える。

最後に、少し話題を変えて、文書館、図書館周辺の食堂事情について比較したい。まずモスクワについては、ルガスピには、1階に美味しいレストランがあり、従業員も気さくだった。周辺にもカフェ、レストランが多くあり、食事には困らない。やや値段が高いという意味で困ることはあるが、お洒落な点は北京、香港の図書館周辺に勝るだろう。旧・レーニン図書館にも地下にカフェがあり、一通りの食事ができる。一方、北京の国家図書館の場合、図書館の食堂は2013年には存在していたが、2014年、15年には閉鎖されていたように見受けられた。しかも図書館周辺には食事ができる場所が少ない。もっとも、向かいに「吉野家」と何軒かの店がある。香港中文大学・中国研究服務中心の場合、付近に大学の学生食堂があり、学外の間もそこで気軽に食事が楽しめる。日本料理や洋食のコーナーもあり、コンビニもあり、およそ不便な点は見当たらない。この点、一見すると、モスクワ、北京、香港の中で、北京が最も不便そうだが、筆者が住んでいた北京大学のキャンパスにある学生食堂では、中国各地の多様な料理を味わうことができ、且つどれも美味しかった。大げさだが、北京大学

の食堂に関して言えば、食は中華にありの一言に尽きると思う。

ここまで述べてきたことは、2013年6月から2016年1月にかけて筆者が行った資料収集の際の情報であり、既に古くなっている可能性がある。また十分に客観的なものではなく、筆者の個人的な感想が含まれている。この点は、何卒ご了承くださいたい。なお、2013-14年のロシアにおける研究は、日露交流センター・若手研究者等フェローシップにより実現したものであることを感謝の意を込めて附記する。

(日本学術振興会海外特別研究員)